

学位論文審査の結果の要旨

1. 申請者氏名	大島 崇行
2. 審査委員	主査：（上越教育大学教授） 水落 芳明 副主査：（鳴門教育大学教授） 久我 直人 委員：（岡山大学教授） 西山 修 委員：（上越教育大学教授） 林 泰成 委員：（上越教育大学教授） 西川 純
3. 論文題目	授業観察実習におけるリフレクションに関する研究
4. 審査結果の要旨	<p>先端課題実践開発専攻先端課題実践開発連合講座 大島崇行 から申請のあった学位論文について、兵庫教育大学学位規則第16条に基づき、下記のとおり審査を行った。</p> <p>論文審査日時：平成31年2月18日（月）9時30分～10時30分</p> <p>場所：兵庫教育大学 ハーバーランドキャンパス 演習室3</p> <p>1. 学位論文の構成と概要</p> <p>第1章 問題の所在と目的</p> <p>第1節 学び続ける教師の育成</p> <p>第2節 授業観察と力量形成</p> <p>第3節 研究の目的</p> <p>第4節 研究の方法</p> <p>第5節 本研究の構成</p> <p>第2章 総括リフレクションを取り入れた授業観察リフレクション実習プログラムの開発と評価</p> <p>第1節 総括リフレクションを取り入れた授業観察リフレクション実習プログラムの開発</p> <p>第2節 調査1 総括リフレクションを取り入れた授業観察リフレクション実習プログラムの評価</p> <p>第3節 結果と考察</p> <p>第4節 本章のまとめ</p>

第3章 授業観察映像を用いた協働的な授業観察リフレクション実習プログラムの開発と評価

第1節 授業観察映像を用いた協働的な授業観察リフレクション実習プログラムの開発

第2節 調査2 授業観察映像を用いた協働的な授業観察リフレクション実習プログラムの評価

第3節 結果と考察

第4節 本章のまとめ

第4章 研究の成果と課題

第1節 研究の総括と成果

第2節 本研究の課題

本研究では、教員養成の実習において、熟練教師と大学生との間で行う授業観察リフレクション実習のプログラムを開発しそのプログラムを評価することを目的とする。そして、本研究の研究結果によるプログラムの「移設可能性」について考察する。

第1章では、教員養成から研修の現状と課題、教師の学びと専門性、養成における実習の概観を行い、問題の所在と本研究の目的を示した。

第2章では、複数回の授業観察とそのリフレクションを俯瞰する総括的リフレクションを取り入れた授業観察リフレクション実習プログラムを開発した。そして、大学生の実習を調査し、その実習におけるプログラムの有効性を明らかにした。本調査において、授業観察リフレクションと総括リフレクションでは大学生の省察の内容が異なっており、授業観察リフレクションでは観察した授業に関する具体的な省察が行われ、総括リフレクションでは自身の観察を俯瞰し、分析する省察が行われた。その要因として各授業観察記録を並べ俯瞰したことが挙げられる。開発した実習プログラムでは、ICTの活用した授業観察記録によって、自身の3回に渡る授業観察を比較しやすい（＜観察を可視化し俯瞰する設計＞）ものとなった。それにより、大学生は自分の観察の枠組に着目し、自分の観察を客観的に見つけ分析するダブル・ヴィジョンでの省察を行った。また、大学生自身も観察の変容を認知し成長を実感したこと、自身の観察の枠組に気付き観察の枠組を拡張していこうという意味を示しており、実習生がこの実習プログラムの効果を感じていたことが明らかになった。

第3章では、本研究はメンターとメンティーがそれぞれの授業観察記録を比較し検討する授業観察リフレクション実習を開発した。そして、大学生と熟練者である現職院生による実習を分析し、その実習における有効性を明らかにした。大学生と現職院生が協働する授業観察リフレクション実習を通し、大学生は自身のもつ評価観の枠組みを再考し、その後の観察を再構築していった。その要因として現職院生との関わりと観察の可視化が挙げられる。開発した実習プログラムでは、大学生が自由に意見を表出する場が確保されており（「観察語り」による＜観察表出の設計＞）、ICTの活用により各観察が可視化（ICT機器による＜観察を可視化し比較する設計＞）されたものであった。それにより、大学生と現職院生との観察の差異が明瞭となった。そして、その差異から大学生が気付きを得たり、現職院生に進んで質問したりするなど自ら学ぶ姿勢をもち、形成的評価のレポートリーを拡充し、ダブル・ヴィジョンでの省察を行っていた。また、大学生自身も授業の様々な現象に対して新たな意味付けを行えるようになったと感じ取っており、この授業観察リフレクションをすることで授業観察力が向上したと認知していることが明らかになった。

第4章では、開発した授業観察リフレクション実習プログラムの本調査における有効性を示した。そして本研究結果より、プログラムの設計思想である①総括リフレクションにおけるダブル・ヴィジョンでの省察を支えたICT機器による＜観察を可視化し俯瞰す

る設計>、②メンターとメンティーの観察の差異を明瞭となり大学生の省察を促したICT機器による<観察を可視化し比較する設計>や③「観察語り」による<観察表出の設計>」を取り入れ、それぞれの現場に合わせた観察実習をプログラムすることによる「移設可能性」が示唆された。これらの設計思想は教育実習に限らず入職後の初任者研修や様々な実習・研修のプログラムへの応用も考えられる。今後は本研究成果を基に、現職研修のプログラムの設計し、その評価をすることが課題である。

2. 審査経過

研究の目的と論文の整合性について

教員の大量退職、大量採用時代において、教員の養成・採用・研修の一体化が求められており、教師の生涯に渡る成長の出発地点である教員養成についてもその充実が期待されている。本研究では、教員養成の実習で多く行われている授業観察に着目し、学生の力量形成を促す授業観察リフレクションプログラムの開発と評価を目的としている。開発したプログラムは教師の生涯に渡る学びのスタート地点である、養成における力量形成を目指したものである。そして、開発した実習プログラムを実習の場で機能させ、その実習の過程を分析し、その有効性を検証している。したがって、本研究の論文構成は、研究目的に整合する妥当な論文構成になっていると認められる。

研究遂行能力について

本博士論文は4章構成である。2章は、日本科学教育学会に2017年に採録された論文と2019年に採録通知を受領している2編の論文が基となっている。3章は、日本科学教育学会に2016年に採録された論文が基となっている。本博士論文の研究の調査の中心となる2章・3章が3編の査読付き論文が基となるものであることから、研究の遂行能力が十分に備わっていると評価する。

論文の独創性や発展性、学校教育への貢献

学校教育においては、授業者となり授業研究を行うことでの力量形成が行われている。本研究は、授業を観察することでの力量形成に着目したプログラムの開発がされており、研究の独創性がある。教員養成の実習カリキュラムにおいては授業観察が設定されることが多く、また、現職教員の研修においても、授業を観察する機会は少なくない。本博士論文は、養成における実習が対象となっているが、本研究結果では様々な場面での応用の可能性が示されており、今後、初任者研修や校内研修等への活用の発展等、学校教育への貢献が期待される。

3. 審査結果

以上により、本審査委員会は 大島崇行 の提出した学位論文が博士（学校教育学）の学位を授与するにふさわしい内容であると判断し、全員一致で合格と判断した。